

幾何光学との関係

ハミルトン・ヤコビ方程式と幾何光学のアイコナル方程式との対応を見ます。

幾何光学の話は大雑把にしかしていません。

波に関する単語は説明なしで使っています。

ハミルトン・ヤコビ方程式とアイコナル方程式の関係は「ハミルトン・ヤコビ方程式」の最後に簡単に触れましたが、ここではもう少し詳しく見ていきます。

アイコナル方程式を波動方程式から導出します。電磁場の話省いて、光は波動方程式に従う波とし、その関数を $\phi(\mathbf{x}, t)$ とします。そうすると、真空における光の波の波動方程式は

$$\nabla^2 \phi(\mathbf{x}, t) = \frac{1}{c^2} \frac{\partial^2 \phi(\mathbf{x}, t)}{\partial t^2}$$

c は光速です。この解は平面波として

$$\phi(\mathbf{x}, t) = \exp[i(\mathbf{k}_c \cdot \mathbf{x} - \omega t)]$$

\mathbf{k}_c は波数ベクトル、 $\omega = ck_c$ ($k_c = |\mathbf{k}_c|$) は角振動数です。一方で、物質中での光の速度は c でなく

$$u = \frac{c}{n(\mathbf{x})}$$

と与えられます (全ての物質で有効ではない)。 n は物質に依存する量で、屈折率 (refraction index) と呼ばれます。物質中でも波動方程式に従っていると

$$\nabla^2 \phi = \frac{1}{u^2} \frac{\partial^2 \phi}{\partial t^2} \quad (1)$$

さらに、物質中でも同じ ω での平面波になっているなら、 \mathbf{e} を \mathbf{k} の単位ベクトルとして

$$\mathbf{k} \cdot \mathbf{x} - \omega t = k\mathbf{e} \cdot \mathbf{x} - \omega t = k_c n \mathbf{e} \cdot \mathbf{x} - \omega t \quad (k = |\mathbf{k}| = \frac{\omega}{u} = n \frac{\omega}{c} = nk_c)$$

これを一般化して、(1) の解として

$$\phi(\mathbf{x}, t) = A(\mathbf{x}) \exp[i(k_c F(\mathbf{x}) - \omega t)] = A(\mathbf{x}) \exp[i(F'(\mathbf{x}) - \omega t)] \quad (2)$$

という形を仮定します。 $A(\mathbf{x})$ は波の振幅を与えます。 F' を F としていきます。 ∇^2 を作用させると

$$\begin{aligned}
\nabla^2(A(\mathbf{x})e^{iF(\mathbf{x})-i\omega t}) &= \nabla \cdot (\nabla A + iA\nabla F)e^{iF(\mathbf{x})-i\omega t} \\
&= (\nabla^2 A + i\nabla A \cdot \nabla F + iA\nabla^2 F + i\nabla A \cdot \nabla F - A(\nabla F)^2)e^{iF(\mathbf{x})-i\omega t} \\
&= (\nabla^2 A - A(\nabla F)^2 + 2i\nabla A \cdot \nabla F + iA\nabla^2 F)e^{iF(\mathbf{x})-i\omega t}
\end{aligned}$$

時間微分では

$$\frac{\partial^2}{\partial t^2} A(\mathbf{x})e^{iF(\mathbf{x})-i\omega t} = -\omega^2 A e^{iF(\mathbf{x})-i\omega t}$$

波動方程式にこれらを入れれば

$$(\nabla^2 A - A(\nabla F)^2 + 2i\nabla A \cdot \nabla F + iA\nabla^2 F) = -k^2 A$$

実部と虚部分けると

$$\nabla^2 A - A(\nabla F)^2 = -k^2 A, \quad 2\nabla A \cdot \nabla F + A\nabla^2 F = 0$$

実部を変形すると

$$\begin{aligned}
\nabla^2 A - A(\nabla F)^2 &= -n^2 k_c^2 A \\
(\nabla F)^2 &= n^2 k_c^2 + \frac{1}{A} \nabla^2 A \\
\left(\frac{1}{k_c} \nabla F\right)^2 &= n^2 + \frac{1}{k_c^2} \frac{1}{A} \nabla^2 A
\end{aligned}$$

F は $k_c F$ なので

$$(\nabla F)^2 = n^2 + \frac{1}{k_c^2} \frac{1}{A} \nabla^2 A$$

真空での光の波長 $\lambda_c = 2\pi/k_c$ から、右辺第2項は

$$\frac{1}{k_c^2} \frac{1}{A} \nabla^2 A = \left(\frac{\lambda_c}{2\pi}\right)^2 \frac{1}{A} \nabla^2 A$$

波長が無視できるほど短ければこの項を無視できて

$$(\nabla F(\mathbf{x}))^2 = n^2(\mathbf{x}) \quad (3)$$

これをアイコナル方程式 (eikonal equation) と言います (eikonal はギリシャ語の像が由来)。このように波長が無視できる状況を扱うのが幾何光学です。幾何とついているように、光の性質を幾何学的に記述できます。幾何学的に記述できることは粒子的に扱えるとも言えるので、解析力学の方法と関係します。

今度は光を粒子のように扱うことにして、光の軌道を点の位置と速度で与えます。2つの点 P_1, P_2 があるとして、それらを結ぶ適当な曲線 γ を選び、その曲線に沿った時間積分を

$$l(\gamma) = c \int_{\gamma} dt$$

と作ります。時間の範囲は γ に沿って光が P_1 から P_2 へ進むのにかかる時間です。これは光学的距離 (optical path) と呼ばれます。物質中での屈折率 n を使うと、曲線の微小な長さ Δs は

$$\Delta s = v \Delta t = \frac{c}{n(\mathbf{x})} \Delta t$$

と書けるので

$$l(\gamma) = \int_{\gamma} ds n(\mathbf{x})$$

ここで、現実の光の軌道は光学的距離の極値によって与えられるとします。これはフェルマー (Fermat) の原理と呼ばれます。

l を作用と見れば、最小作用の原理と同じ状況なので、オイラー・ラグランジュ方程式を使います。「オイラー・ラグランジュ方程式」では時間 t の積分として求めているので、 s を任意のパラメータ λ に変えます。曲線の微小な長さ Δs は $\mathbf{x} = (x_1, x_2, x_3)$ の微小変化の長さなので

$$\Delta s = \sqrt{\Delta x_1^2 + \Delta x_2^2 + \Delta x_3^2} = \sqrt{\left(\frac{\Delta x_1}{\Delta \lambda}\right)^2 + \left(\frac{\Delta x_2}{\Delta \lambda}\right)^2 + \left(\frac{\Delta x_3}{\Delta \lambda}\right)^2} \Delta \lambda$$

として、 λ に変えれば

$$l(\gamma) = \int_{\gamma(\lambda)} d\lambda n(\mathbf{x}(\lambda)) \sqrt{\left(\frac{dx_1}{d\lambda}\right)^2 + \left(\frac{dx_2}{d\lambda}\right)^2 + \left(\frac{dx_3}{d\lambda}\right)^2}$$

$\gamma(\lambda)$ は曲線のパラメータが λ であることを表しています。積分部分をラグランジアン

$$L(\mathbf{x}, \frac{d\mathbf{x}}{d\lambda}) = n(\mathbf{x}) \sqrt{\left(\frac{dx_1}{d\lambda}\right)^2 + \left(\frac{dx_2}{d\lambda}\right)^2 + \left(\frac{dx_3}{d\lambda}\right)^2} = n(\mathbf{x}) \frac{ds}{d\lambda}$$

と見れば

$$\frac{\partial L}{\partial x_i} = \frac{\partial n}{\partial x_i} \frac{ds}{d\lambda} \quad (i = 1, 2, 3)$$

と

$$\begin{aligned} \frac{\partial L}{\partial(dx_i/d\lambda)} &= n \frac{\partial}{\partial(dx_i/d\lambda)} \sqrt{\sum_{j=1}^3 \left(\frac{dx_j}{d\lambda}\right)^2} = n \frac{dx_i}{d\lambda} \left(\sum_{j=1}^3 \left(\frac{dx_j}{d\lambda}\right)^2\right)^{-1/2} \\ &= n(\mathbf{x}) \frac{dx_i}{d\lambda} \frac{d\lambda}{ds} \\ &= n(\mathbf{x}) \frac{dx_i}{ds} \end{aligned}$$

から、オイラー・ラグランジュ方程式は

$$\begin{aligned} 0 &= \frac{\partial L}{\partial x_i} - \frac{d}{d\lambda} \frac{\partial L}{\partial(dx_i/d\lambda)} \\ &= \frac{ds}{d\lambda} \frac{\partial n}{\partial x_i} - \frac{d}{d\lambda} \left(n \frac{dx_i}{ds}\right) \\ &= \frac{ds}{d\lambda} \frac{\partial n}{\partial x_i} - \frac{ds}{d\lambda} \frac{d}{ds} \left(n \frac{dx_i}{ds}\right) \\ \frac{d}{ds} \left(n \frac{dx_i}{ds}\right) &= \frac{\partial n}{\partial x_i} \end{aligned} \tag{4}$$

これが光の軌道を与える式です。
式を分かりやすくするために

$$\Delta\sigma = n^{-1}(\mathbf{x}) \sqrt{\sum_{j=1}^3 \left(\frac{dx_j}{d\lambda}\right)^2} \Delta\lambda$$

となるパラメータ σ に置き換えると

$$\frac{d\lambda}{d\sigma} = n(\mathbf{x}) \left(\sum_{j=1}^3 \left(\frac{dx_j}{d\lambda}\right)^2\right)^{-1/2} = n \frac{d\lambda}{ds}$$

から

$$\frac{dx_i(\sigma)}{d\sigma} = \frac{dx_i(\lambda)}{d\lambda} \frac{d\lambda}{d\sigma} = \frac{dx_i(\lambda)}{d\lambda} \frac{d\lambda}{ds} n$$

もう1回微分すると

$$\begin{aligned}
 \frac{d^2 x_i(\sigma)}{d\sigma^2} &= \frac{d}{d\sigma} \left(\frac{dx_i(\lambda)}{d\lambda} \frac{d\lambda}{ds} n \right) \\
 &= \frac{d\lambda}{d\sigma} \frac{d}{d\lambda} \left(\frac{dx_i(\lambda)}{ds} n \right) \\
 &= n \frac{d\lambda}{ds} \frac{ds}{d\lambda} \frac{d}{ds} \left(\frac{dx_i(\lambda)}{ds} n \right) \\
 &= n \frac{\partial n}{\partial x_i} \\
 &= \frac{1}{2} \frac{\partial n^2}{\partial x_i}
 \end{aligned}$$

σ による2階微分方程式になるので、これは運動方程式の形です。というわけで、光の軌道の式は、ポテンシャル $-n^2/2$ での質量が1の粒子の運動方程式の形で書けます。

ハミルトン・ヤコビ方程式を求めます。運動エネルギーの形にすると

$$\frac{1}{2} \sum_{i=1}^3 \left(\frac{dx_i(\sigma)}{d\sigma} \right)^2 = \frac{1}{2} n^2 \left(\sum_{j=1}^3 \left(\frac{dx_j}{d\lambda} \right)^2 \right)^{-1} \sum_{i=1}^3 \left(\frac{dx_i(\lambda)}{d\lambda} \right)^2 = \frac{1}{2} n^2$$

なので、粒子としての力学的エネルギーは0で、粒子としてのハミルトニアンは

$$H_{ray} = \frac{\mathbf{p}^2}{2} - \frac{1}{2} n^2(\mathbf{x})$$

\mathbf{p} は $dx/d\sigma$ で与えています。ハミルトニアンに時間依存がないので (ポテンシャル $V(\mathbf{x})$ での粒子と同じハミルトニアン)、母関数 S_{ray} は

$$S_{ray}(\mathbf{x}, \boldsymbol{\alpha}, t) = G_{ray}(\mathbf{x}, \boldsymbol{\alpha}) - Et \quad (E = H)$$

$$p_i = \frac{\partial S_{ray}}{\partial x_i} = \frac{\partial G_{ray}}{\partial x_i}$$

$\boldsymbol{\alpha}$ は定数です。これから、ハミルトン・ヤコビ方程式は

$$(\nabla G_{ray})^2 = n^2(\mathbf{x})$$

として、アイコナール方程式の形になります。このように、粒子的な扱いをした光のハミルトン・ヤコビ方程式は幾何光学の式と対応します。そして、この対応から、波と粒子の量に関係を与えられると予想できます。

ここから、波と粒子の関係を与え、それが量子力学に対応させられることを見ます。そのために、曲面の話を持ち込みます。

粒子では質量を m 、時間に依存しないポテンシャルを $V(\mathbf{x})$ として、ハミルトニアンを

$$H = \frac{\mathbf{p}^2}{2m} + V(\mathbf{x})$$

p は運動量です。ハミルトニアンに時間依存がないので母関数 S とハミルトン・ヤコビ方程式は

$$S(\mathbf{x}, \boldsymbol{\alpha}, t) = G(\mathbf{x}, \boldsymbol{\alpha}) - Et \quad (E = H) \quad (5a)$$

$$p_i = \frac{\partial S}{\partial x_i} = \frac{\partial G}{\partial x_i} \quad (5b)$$

$$(\nabla G)^2 = |\mathbf{p}|^2 = 2m(E - V) \quad ((\nabla G)^2 = \left(\frac{\partial G}{\partial x_1}\right)^2 + \left(\frac{\partial G}{\partial x_2}\right)^2 + \left(\frac{\partial G}{\partial x_3}\right)^2) \quad (5c)$$

ここで、ある固定された $\boldsymbol{\alpha}$ に対して $G(\mathbf{R}) = \text{定数}$ となる曲面を作ります。曲面では 2 つのパラメータが必要ですが、1 つのパラメータは固定されているとし、残りのパラメータを τ とします。このとき、曲面のベクトルを $\mathbf{R}(\tau) = (X(\tau), Y(\tau), Z(\tau))$ とすれば

$$\frac{dG}{d\tau} = \frac{dX}{d\tau} \frac{\partial G}{\partial x} + \frac{dY}{d\tau} \frac{\partial G}{\partial y} + \frac{dZ}{d\tau} \frac{\partial G}{\partial z} = \frac{d\mathbf{R}}{d\tau} \cdot \nabla G = \frac{d\mathbf{R}}{d\tau} \cdot \mathbf{p}$$

$d\mathbf{R}/d\tau$ は曲面上でのベクトルの変化なので、曲面の接ベクトルです。そして、 $G = \text{定数}$ から微分すれば 0 なので、 \mathbf{p} は曲面の接ベクトルと直交します。このため、粒子の軌道はこの曲面と直交し、運動方程式に従います (下の補足参照)。

G が定数になる曲面としましたが、時間 $t = 0$ のときは

$$S(t = 0) = G(\mathbf{x}_0, \boldsymbol{\alpha}_0(\mathbf{x}_0, \mathbf{p}_0)) \quad (\boldsymbol{\alpha}_0 = \boldsymbol{\alpha}(\mathbf{x}_0, \mathbf{p}_0)) \quad (6)$$

$t = 0$ での位置と運動量を $\mathbf{x}_0, \mathbf{p}_0$ とし、 $\boldsymbol{\alpha}$ は \mathbf{x}, \mathbf{p} を変換したもののなので $\mathbf{x}_0, \mathbf{p}_0$ を変数として書いています。このように $S = G$ になるので、 S を定数と見ることにします。そうすると、 $t = 0$ で (6) と一致する時間 t での G は

$$G(\mathbf{R}, \boldsymbol{\alpha}) = S_0 + Et \quad (7)$$

S_0 は (6) です。 $\mathbf{p} = \nabla G = \nabla S$ なので、この曲面とも運動量は直交します。

波で作れる曲面として、波面があります。波面は位相をある定数として作る曲面なので、(1) では定数 C によって

$$k_c F(\mathbf{x}) - \omega t = C \quad (8)$$

と与えられ、(7) の曲面と同じ形です。

ちなみに、この対応から (4) の光は波面と直交して進みます。波面に直交して進む軌道の光は光線 (ray, light ray) と呼ばれ、幾何光学での光は光線です。また、光線を集めたものは光束 (pencil) と呼ばれます

G, F の対応から、エネルギーと角振動数の関係が作れます。(7) と (8) には定数倍の任意性があるために、 \hbar を定数として

$$E = \hbar\omega$$

とすれば、 G と F は

$$G = \hbar k_c F$$

そして、アイコナル方程式 (3) とハミルトン・ヤコビ方程式 (5c) の対応から

$$n = \frac{1}{\hbar k_c} \sqrt{2m(E - V)}$$

$n = c/u$ なので

$$u = \frac{c}{n} = \frac{\hbar k_c}{\sqrt{2m(E - V)}} = \frac{\hbar\omega}{\sqrt{2m(E - V)}} = \frac{E}{\sqrt{2m(E - V)}} = \frac{E}{|\mathbf{p}|}$$

このように、波と粒子の量が関係づけられます。また、(7) の時間微分は

$$0 = \frac{dS_0}{dt} = \frac{dG}{dt} - E = \frac{d\mathbf{R}}{dt} \cdot \nabla W - E$$

$d\mathbf{R}/dt$ は曲面上のある点の時間変化なので、曲面の速度 \mathbf{V} と言って

$$\mathbf{V} = \frac{E}{|\mathbf{p}|} = u$$

このように粒子の速度 $\mathbf{v} = \mathbf{p}/m$ ではなく、波の速度（位相速度）が出てくることから、波面と対応するのが分かります。

エネルギー E と角振動数 ω の関係は、 \hbar をプランク定数 $h = 2\pi\hbar$ とすれば量子力学での関係そのものです。平面波を

$$\phi(\mathbf{x}, t) = \chi(\mathbf{x})e^{-i\omega t} = \chi(\mathbf{x})e^{-iEt/\hbar}$$

として、波動方程式に入れてみると

$$\begin{aligned}\nabla^2 \phi(\mathbf{x}, t) &= \frac{1}{u^2} \frac{\partial^2 \phi(\mathbf{x}, t)}{\partial t^2} \\ \nabla^2 \chi(\mathbf{x}) &= -\frac{E^2}{\hbar^2} \frac{1}{u^2} \chi(\mathbf{x}) \\ &= -\frac{E^2}{\hbar^2} \frac{2m(E-V)}{E^2} \chi(\mathbf{x}) \\ &= -\frac{2m(E-V)}{\hbar^2} \chi(\mathbf{x})\end{aligned}$$

$$\left(-\frac{\hbar^2}{2m} \nabla^2 + V\right) \chi(\mathbf{x}) = E \chi(\mathbf{x})$$

これは時間に依存しないシュレーディンガー方程式です。

・補足

G を定数とする曲面から運動方程式が出てくることを示します。曲面に直交する曲線があり、そのパラメータを曲線の長さ s で与えたとします。その曲線上の位置ベクトルを \mathbf{r} とすれば、曲線の単位接ベクトルは $d\mathbf{r}(s)/ds$ です。そうすると、運動量は

$$\mathbf{p} = |\mathbf{p}| \frac{d\mathbf{r}}{ds}$$

G は曲線のパラメータの微小な変化 Δs に対して

$$G(s + \Delta s) \simeq G(\mathbf{r}) + \frac{dG}{ds} \Delta s$$

これは曲線の位置ベクトルの微小な変化 $\Delta \mathbf{r}$ としても同じなので

$$G(\mathbf{r} + \Delta \mathbf{r}) \simeq G(\mathbf{r}) + \nabla G \cdot \Delta \mathbf{r} = G(\mathbf{r}) + \nabla G \cdot \frac{d\mathbf{r}}{ds} \Delta s = G(\mathbf{r}) + \frac{dG}{ds} \Delta s$$

よって、(5b) から

$$\begin{aligned}\frac{dG}{ds} &= \nabla G \cdot \frac{d\mathbf{r}}{ds} \\ &= |\mathbf{p}| \\ \nabla \frac{dG}{ds} &= \nabla |\mathbf{p}|\end{aligned}$$

となり

$$\frac{d\mathbf{p}}{ds} = \nabla |\mathbf{p}|$$

s を時間 t にするために

$$\Delta s = \sqrt{\Delta x^2 + \Delta y^2 + \Delta z^2} = \sqrt{\left(\frac{\Delta x}{\Delta t}\right)^2 + \left(\frac{\Delta y}{\Delta t}\right)^2 + \left(\frac{\Delta z}{\Delta t}\right)^2} \Delta t = \sqrt{\frac{d\mathbf{r}}{dt} \cdot \frac{d\mathbf{r}}{dt}} \Delta t = |\mathbf{v}| \Delta t$$

これによって、 s 微分は

$$\frac{d\mathbf{p}}{ds} = \frac{d}{ds} |\mathbf{p}| \frac{d\mathbf{r}}{ds} = \frac{dt}{ds} \frac{d}{dt} (|\mathbf{p}| \frac{dt}{ds} \frac{d\mathbf{r}}{dt}) = \frac{1}{|\mathbf{v}|} \frac{d}{dt} \frac{|\mathbf{p}| \mathbf{v}}{|\mathbf{v}|} = \frac{m}{|\mathbf{v}|} \frac{d\mathbf{v}}{dt}$$

となり

$$\begin{aligned} \frac{d\mathbf{p}}{ds} &= \nabla |\mathbf{p}| \\ m \frac{d\mathbf{v}}{dt} &= |\mathbf{v}| \nabla |\mathbf{p}| \end{aligned}$$

右辺は (5c) から

$$|\mathbf{v}| \nabla |\mathbf{p}| = \frac{|\mathbf{p}|}{m} \nabla \sqrt{2m(E - V)} = -\frac{|\mathbf{p}|}{\sqrt{2m(E - V)}} \nabla V = -\nabla V$$

なので

$$m \frac{d\mathbf{v}}{dt} = -\nabla V$$

として、運動方程式が出てきます。

曲面のことを気にしなければ、運動方程式はもっと単純に求められます。(5b) を時間 t で微分すると、 α は定数なので

$$\begin{aligned}
\frac{dp_i}{dt} &= \frac{d}{dt} \frac{\partial}{\partial x_i} G(\mathbf{x}, \boldsymbol{\alpha}) \\
m \frac{d^2 x_i}{dt^2} &= \frac{d}{dt} \frac{\partial}{\partial x_i} G \\
&= \sum_{j=1}^3 \frac{dx_j}{dt} \frac{\partial}{\partial x_j} \frac{\partial G}{\partial x_i} \\
&= \frac{1}{m} \sum_{j=1}^3 \frac{\partial G}{\partial x_j} \frac{\partial}{\partial x_i} \frac{\partial G}{\partial x_j} \\
&= \frac{1}{2m} \sum_{j=1}^3 \frac{\partial}{\partial x_i} \left(\frac{\partial G}{\partial x_j} \right)^2 \\
&= \frac{1}{2m} \frac{\partial}{\partial x_i} \left(\left(\frac{\partial G}{\partial x_1} \right)^2 + \left(\frac{\partial G}{\partial x_2} \right)^2 + \left(\frac{\partial G}{\partial x_3} \right)^2 \right) \\
&= \frac{1}{2m} \frac{\partial}{\partial x_i} (2m(E - V)) \\
&= - \frac{\partial V}{\partial x_i}
\end{aligned}$$

なので

$$m \frac{d^2 \mathbf{x}}{dt^2} = -\nabla V$$

として、運動方程式になります。